

# 研究法としての事例研究

## : 系統的事例研究という視点から

野田 亜由美 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

### 要約

近年、事例研究は方法論として大きく発展しており、世界的に注目が集まっている。しかしながら、日本の臨床心理学研究では、事例研究が中心的な役割を与えられているにもかかわらず、十分な議論や研究法としての進展がなかった。本論文では、事例研究の研究法としての意義を概観することを目的とし、まず歴史的背景と位置づけを概説するとともに、事例研究固有の効用と限界、および限界への対処方法について述べた。続いて研究法としての発展がめざましい系統的事例研究について、中心的な原則をまとめた。さらに研究の目的別に主要な4つの系統的事例研究法を紹介した。また国内における事例研究を取り巻く現状を明らかにするため、過去10年分の事例研究を方法論の視点から分類、検討した。最後にこの分類を踏まえ、4つの系統的事例研究法の観点から、国内で事例研究を研究法として発展させる上での課題と今後の対応について展望した。

**キー・ワード** : 事例研究, 系統的事例研究, 研究法

## I はじめに

### 1. 事例研究を取り巻く状況

研究法としての事例研究を再考する機運が高まっている (Dattilio et al., 2010 ; McLeod, 2010 ; 岩壁, 2013c)。心理臨床家はこれまで、自身の事例を振り返るため、仲間同士で事例に関する考えや体験を共有するため、あるいは教育の場で例として取り上げるために事例研究に取り組んできた。しかし近年、事例研究は心理療法の理論および実践のエビデンス構築に重要な貢献をもたらすものであるとの認識に変化しつつある (McLeod & Elliott, 2011)。

McLeod & Elliott (2011) は、この認識の変化には以下の2つの要因が影響しているとしている。1つ目の要因はランダム化比較試験 (Randomized Controlled Trials : RCTs) に基づいたエビデンスベースト研究を進める上で、避けがたい困難があることへの懸念が高まっていることが挙げられる

(Westen et al., 2004)。RCTs はアメリカ心理学会第12部会によって決定された「実証的支持を得た心理治療」 (Empirically Supported Treatments : ESTs) の介入の効果を判断するための研究法として重視されている (岩壁, 2013c)。RCTs は研究法として有効であるが、心理療法のプロセスや結果に関する知識を蓄積するためには、研究方法に多元的なアプローチが必要である。また RCTs で得られたエビデンスに、質的研究や系統的な事例研究などのアプローチを加えることで心理療法の方針や実践のプラットフォームがより安定するという指摘もある (Barkham et al., 2010)。

2つ目の要因として挙げられているのは、事例研究に関する方法論としてのめざましい発展である。過去の事例研究は、セラピストの説明に拠るのみで、データの収集方法や分析方法の外的な精密さを欠きやすかったといえる。しかし今日では

多くのセラピストが尺度の使用や面接の録音を受け入れており、これによりセラピスト以外の研究者が解釈や分析を行うことが可能になった (McLeod & Elliott, 2011)。さらに事例研究の研究者たちがデータの分析や提示方法について重要なアイデアを開発してきた (Elliott, 2001, 2002 ; Fishman, 1999 ; Midgley, 2006 ; Stiles, 2007)。これにより、今日カウンセリングや心理療法に関する事例研究は、系統性かつ厳密性をもって進めることができるようになったといえる (Barlow & Nock, 2009 ; McLeod, 2010)。

さらにこうした時流を象徴するように、2002年と2005年にそれぞれ事例研究の専門誌が創刊された。またアメリカ心理学第29部会(心理療法)の機関誌である“Psychotherapy”にもエビデンス事例研究というコーナーが設けられ(岩壁, 2013a), 世界的に注目が集まっていることがうかがえる。

## 2. 本論文の目的

以上述べてきたように、事例研究は研究法として近年大きく発展しており、研究者の関心が高まっている。一方日本の臨床心理学研究では、学派を中心とした学問構成で臨床事例研究が中心的な役割を与えられている(岩壁, 2013c)にもかかわらず、事例研究に関する十分な議論や研究法としての進展はほとんどなかった。

本論文では、以下に述べる多様な観点から研究法としての事例研究について検討し、その方法論的意義を概観することを目的とする。まず事例研究の歴史的背景と位置づけを概説し、現在考えられている事例研究固有の効用と限界、および限界への対処方法について述べる。続いて、今後事例研究のメインストリームとなるであろう系統的事例研究について、中心的な原則をまとめる。それに続いて、研究の目的別に、主要な4つの系統的事例研究法を紹介する。また日本における事例研

究を取り巻く現状を明らかにするため、過去10年分の事例研究を方法の視点から分類する。最後に、この分類を踏まえ、4つの系統的事例研究法の観点から、国内で事例研究を研究法として発展させる上での課題と解決のための方策について考察する。小稿を通してひとつの研究法としての事例研究の理解を深め、国内における事例研究の発展の一助としたい。

## II 事例研究の歴史的背景と今日における位置付け

心理療法の伝統的な臨床事例研究は、Freudによって発表されたDora (Freud, 1901)やRat Man (Freud, 1909)などの一連の精神分析の事例がそのはじまりとされている (McLeod, 2010)。Freudはその日に会った患者に関する詳細なメモをその晩に書き、このメモを事例研究に用いていた。またFreudに続く世代の精神分析家もこれに似た方法を継承した (e.g., Malan, 1979 ; Casement, 1985, 1990)。しかしこうした方法では、重要な情報が抜け落ちている可能性や、集められたデータの解釈の厳密さや系統性や一貫性を確かめる方法が無いといった問題が考えられる。精神分析家のDonald Spence (1989, 2001)は、従来の方法について、セラピストがもともと持っている理論的枠組みや個人的な興味の中で、選択的に事例が想起されるため、一方それと矛盾するようなエビデンスが見落とされる、と批判している。

こうした伝統的な事例研究に対する批判の高まりは、事例研究の方法に系統性を探求する機運を高めるきっかけとなった (McLeod, 2010)。1960年代以降、影響力を持つ心理学者たちによって、事例を研究で扱う際の厳密さを発展させるために必要な要素が論じられてきた (Bolgar, 1965 ; Dukes, 1965 ; Leitenberg, 1973 ; Shapiro, 1961)。さらに系統的な方法論を発展させる鍵となる事例

研究 (e.g., Edwards, 1998; Galassi and Gersh, 1991; Hill, 1989; Schneider, 1999; Stiles, 2007; Turpin, 2001) が 1990 年代前後から登場し、議論をへて、研究法として発展していった。その結果、研究の目的別に事例研究の 4 つのジャンルともいえる異なるタイプの研究法が登場した。なおこの 4 種については後述する。

これまで述べてきたように、近年事例研究は研究法として重要な発展を遂げてきている。しかし McLeod (2013) は、臨床心理学に関する論文における事例研究の数はわずかであり、ここ 10 年ほどは革新的な方法論が研究者たちに定着しなかったと述べている。心理療法の科学的な研究方法に関する議論が盛んな北アメリカをはじめとした諸外国においても、系統性を備えた事例研究が浸透したとは言い難い。

### III 事例研究の効用と限界

それぞれの研究法が強みと弱みと呼べる側面を持っている。事例研究はどのような特徴を持つ研究法といえるのか。以下に強みと弱みを挙げ、続いて弱みを克服すべく検討されてきた対処法について述べる。

#### 1. 事例研究固有の強み

事例研究が持つ、固有の強みについて、McLeod & Elliott (2011) は次の 4 点を挙げている。

##### 1) 複雑性

大規模な調査では、サンプル数の関係から比較的少ない観点で観察される場合が多い。一方、事例研究では、個別の事例から多くのことを観察できるため、異なる要因やプロセスの相互作用の複雑なパターンの証明や分析が可能である。

##### 2) 縦断への感度

広範囲に渡る研究やサンプル数の多い研究では、ある時点で同時に起こった出来事の瞬間を捉えたり、いくつかの測定ポイントからまとまったデー

タを比較する傾向がある。一方、事例研究では、一連の多様な観察に基づき、時間とともにどのように変化が展開していったのかを詳細に検討することができる。

##### 3) 文脈の評価

事例研究では文脈的な要因の影響を調べる余地がある。これはサンプル数の多い研究では困難なことである。

##### 4) ナラティブとしての知

良い事例研究とは、読者に忘れがたい物語を伝えるものであり、クライアントとの実践を導く既存の「行動スキーマ」へと容易に転化できるような知識を提供するものである。それゆえに、事例研究は知識という形で心理臨床家に特別な関連がある。

なお、McLeod (2010) は、これらの特長は事例研究が潜在的に包含しているものであり、こうした強みを生かさずに事例研究を行うこともできると皮肉を込めて述べている。

### 2. 事例研究の弱み

研究法の科学性が追究されるにつれ、事例研究に関する多くの限界が指摘されてきた。以下に、これまで指摘された中心的な問題点について挙げる。(Flyvbjerg, 2006; McLeod, 2010; McLeod & Elliott, 2011)。

#### 1) 主観性とバイアスの問題

事例研究では、研究者が元々持っている仮説を論証あるいは支持するといった偏りがしばしば起こる。論文内で提示されるエビデンスの多くは、著者が支持する治療アプローチが用いられた事例の一場面から構成されている。また支持するアプローチが効果的でないことを示すような事例が論文の題材として選ばれることはあまりない。

#### 2) 一般化可能性の問題

例えば、ある事例で「うつ病のクライアントに

A療法が効果的であった」ことは「A療法はうつ病に効果的である」ことを意味しない。この事例から一般化可能性に関して記述できるのは、「A療法はうつ病に効果的である可能性が考えられる」あるいは「A療法はうつ病に効果が無いという主張は反証された」という内容である。

### 3) 因果関係の問題

事例研究では、因子間の因果関係を明らかにできないことが指摘される。ある特定の心理療法による介入を行ったクライアントの症状がカウンセリングの前後で大きく改善したとする。しかし、単一事例研究ではクライアントが良くなった要因が心理療法であったかどうかは明言できない。なぜなら、結果への他の要因による影響を排除することはできないからである。こうした批判では、RCTsのような厳密に統制された実証研究でのみ、因果関係にまつわる結果を生み出すことができると述べられることが多い。

### 3. 事例研究の弱みへの反論と対処法

事例研究の弱みは克服できない問題なのだろうか。続いてこれらの批判に対する反論と対処方法を述べる。

まず1) 主観性とバイアスの問題については、Luborskyら(1999)が、心理療法の効果を比較する効果研究では、研究者の支持する心理療法が研究の結果に強く影響することを明らかにしている。Bという心理療法を支持している研究者のもとで行われた効果研究では、他の心理療法に比べB療法が最も効果が高い、という調査結果になる傾向がある。したがって、研究者のバイアスに関する問題は事例研究に限られた現象ではないことが分かる。そしてこの問題に対処する方策として以下のような提案がなされてきた。まずバイアスに関する透明性を高めるために、研究者が自身の支持する心理療法やバックグラウンド、既に自身が持っている仮説などを記述することが役に立つ

(Etherington, 2000; Finlay and Gough, 2003)。また、複数の研究者で分析を行うことも、この問題への対処として最も良く用いられている方法である (McLeod, 2010)。

次に2) 一般化可能性の問題への対応としては、以下のような対応が考えられる。まず事例をより大きな枠組の事例群から選ぶ方法が挙げられる。例えば Watson らは良い結果・悪い結果の事例という枠組みから事例を選定し分析を行った (Watson et al., 2007)。この方法により、1つの事例から得られた結果が、その事例が代表している事例群へ一般化できるかもしれない、という仮説を主張できる。また事例のデータを集めるために、標準化された尺度を用いることも対策の一つである。これにより、セラピー前の状態や変化量を尺度の標準的な値と比較することが可能になる。しかしいずれの対策を行っても、1つの研究から得られた結果を一般化することは不可能であり、一般化可能性について言及する際には注意が必要であると McLeod (2010) は述べている。そしてこの注意点は事例研究に限らず、RCTs や実証研究、大規模調査など、あらゆる研究方法においても同じことが言える。

最後に3) 因果関係の問題については、注意深くデザインされた事例研究は、心理療法の原因と結果に関する要因を同定し分析する上で中心的な役割を果たすとされている (Edelson, 1986)。事例研究では、限られた出来事にまつわるデータを多く集めることが可能である。そのため因果性に関連する内容だけを分析することができる。しかしこれは系統的に一貫した方法で研究が行われた場合に限られることに注意しなければならない。また、時間経過ごとに記録された数値列を分析する時系列分析を採用することでも、因果関係に関する知見を発展できる。このアプローチは、変化が起こる直前に起こった出来事が変化を起こす要因である、というシンプルな考えに基づいている

(McLeod, 2010)。

このように、事例研究は多くの批判を受けながらも、それと同時に、効果的な解決方法が事例研究を行う研究者から考案されてきた。

#### IV 系統的事例研究の興隆

##### 1. 系統的事例研究とは

前述したように、従来の事例研究の進め方に対する批判が高まり、系統性を持った事例研究法が発展してきた。系統性とは観察、記述、評定をある一定の規則や基準に従って行うことを意味し、科学的研究の特徴の一つである (Heppner et al., 1999)。系統的事例研究とは岩壁 (2010) の定義によれば、“量的データを使って事例の特徴を明確に示し、質的データを用いてデータの流れを示す”研究法である。また Kazdin (1981) は、系統的事例研究に不可欠な要素として以下の2点を挙げている。①変化を客観的に示すことができるよう、何らかの測定法を取り入れること。②セラピー開始前に、クライアントの心理的状態の安定したベースラインを査定しておくこと、である。②を明らかにすることで、セラピー開始後に変化が起こった際、それが尺度の信頼性の問題ではないことが分かる。またその変化はセラピーの影響によるもので、他の要因によるものではないことも示唆される。McLeod (2010) は著書の中で、系統的事例研究について 11 の方法論の原則を提示している。面接場面の記述を含めた多様な情報をもとに、豊かなデータセットを作ること、他の事例と比較できるよう標準化された尺度を用いること、分析を複数人で行うこと、などの項目が列挙され、厳密な研究デザインのガイドラインとなっている。

このように、系統的事例研究とはある特定の研究法を指すものではない。Iwakabe & Gazzola (2009) は、カウンセリングにおける事例研究を3種類に分類しており、以上から系統的事例研究はその1つであると述べている。系統的事例研究

の中核をなす原則は以下の2点に集約できると考えられる。①リサーチクエスチョンが明確に設定され、事例報告ではないこと。②一定の原則に従い、量的データと質的データの両方が収集され、分析されること、である。

##### 2. 研究目的別の系統的事例研究法

McLeod (2010, 2013) は、事例研究に関する批判や議論をへて確立された、研究の目的に応じた4つのジャンルともいえる異なる特徴を持った系統的事例研究法を紹介している。いずれも臨床的意義の高い研究法であり、同時に研究法として検討が重ねられてきたものである。

##### 1) 成果指向事例研究 (Outcome-oriented case study)

ある事例において心理療法はどんな効果があったのか、クライアントの変化に心理療法がどの程度貢献できるのか、といった問いに関連する事例研究法。単一事例研究 (“n=1” or “single subject case study”) と解釈学的単一事例研究 (Hermeneutic Single Case Design) のサブジャンルが存在する。単一事例研究では一連の面接を通じて集められた結果やプロセスの尺度のデータを用いて時系列分析を行う。これによって、ある事例における変化の性質・程度・持続性の評価ができる。また特定の介入方法が変化に貢献する程度を評価することも可能である (Morgan & Morgan, 2009; Morley, 2007)。一方、解釈学的単一事例研究 (Elliott, 2002) では、量的かつ質的に豊かなデータが事例から収集される。続いてデータの分析には判定を伴うアプローチがとられる。データの記録が肯定的 (つまりクライアントが改善し、観察されたものが心理療法に貢献しているような状態) であるか、懐疑的 (つまりクライアントに変化が起らない、あるいは観察された改善が治療外の要因によるものである可能性がある

ような状態)であるかを系統的な方法で判定する作業が行われる。そしてこれらの対照的な見解から行われる議論は、熟達者から成るチームによってアセスメントされる。判断する人は事例を良い—悪いで評価し、その評価を下した確信の程度も提示する。

## 2) 理論指向事例研究 (Theory-oriented case study)

ある事例での心理療法のプロセスは、理論的な用語でどのように理解することができるか、既存の理論モデルをテストし、より良いものにするために、この事例のデータはどう活用できるか、あるいは新しい理論的枠組みを構築するのにこのデータはどう活用できるか、といった問いを探索する際に用いられる事例研究方法である。科学の原理に関連して、この理論指向事例研究は特に重要性が高いといえる。なぜならば、一事例から得られた知見は、より多くの事例に一般化できる可能性を持つ。そのため、ある理論を事例に基づいて支持あるいは論駁するということは、重要な意味を持つ。Stiles (2007, 2009) や Hill (1989) の研究によって事例研究のエビデンスが理論構築において果たす役割が形作られたといえる。

## 3) 実践指向事例研究 (Pragmatic case study)

どのような治療計画や介入が心理療法に良い結果をもたらしたのか、そのクライアントに必要な治療的方法をセラピストはどう適応させ修正していったのか、といった問いを扱う事例研究方法。実践指向事例研究の第一の目的は、特定の治療アプローチが、特定のクライアントに対しどのように展開していったのかを詳細に提示することにある。伝統的な事例研究に似ているが、事例に関する量的および質的な情報を幅広く提示することと、一貫した方法に固執して研究を進めることが研究者に求められる点において従来の事例研究と異なる。なおこの研究方法の提唱者である Fishman は、多様な理論アプローチから成る、系統的で厳密な査

読付きの事例研究のデータベースを作ることなどを目的に、インターネット上に Pragmatic Case Studies in Psychotherapy という電子ジャーナルを設立している。

## 4) 体験・ナラティブ指向事例研究 (Experiential or narrative case study)

この事例で、クライアントもしくはセラピストはどんな体験をしたのか、この事例にはどのような意味があったか、といった問いを扱う事例研究方法。クライアントやセラピストの視点から、事例のストーリーを伝えることが目的の研究法である。伝統的な質的研究法であるナラティブ研究に属するという見方もできる。また読者が、クライアントやセラピストにとってその心理療法がどんなものであったかという感覚を得られることも重要である。定型化された方法は存在しないが、セッション内で使われた言葉を正確に分析するために、面接の録音データや録画データが用いられることがある。またインタビューが行われることも多い。クライアントによって書かれた事例の自叙伝 (Dinnage, 1989) や、データ収集や分析方法が明確に提示されたナラティブ事例研究 (Etherington, 2000) などこのジャンルに含まれるが、投稿論文の数としては少ない。

紹介した4つの方法以外にも、系統的な事例研究のアプローチは多く存在する。しかし、いずれも明確なリサーチクエスチョンが設定され、研究方法の原則が他の要素よりも強調されている点において共通している (McLeod, 2010)。

## V 日本における事例研究の現状と課題

### 1. 日本の臨床心理学における事例研究

#### 1) 事例研究に関する論調

日本の臨床心理学における事例研究は1970年代半ばに一定の役割を担い始めたとされる(渡邊, 2013)。河合は1980年代に“普遍的な法則を見出すような論文よりも、ひとつの事例の赤裸々な報

告の方が、はるかに実際に「役立つ」（河合、1986）と述べている。また2000年代には事例研究について“「研究」としての評価は高くない”と明言しながらも、“臨床心理士の訓練の中核である”（河合、2001）と述べ、一貫してその実践的・教育的価値の高さを主張した。類似した指摘として村瀬（2001）は“事例研究とは、治療者が自身の資質向上を目指し、かつ望むらくは、技法の工夫、理論の提示を当面の目的とするが、その成果は当然、クライアントへの関わりへ還元され、活かされていくものであらねばならない”と述べ、河合と同じく実践や教育としての意義を強調している。

一方、わが国においても事例研究の一般性や普遍性に関する批判は少なくない（下山、2000；大野、2001；山本、2001；山川、2012）。山本（2001）は心理臨床における事例研究が科学的根拠よりも「有効性」や「実用性」が臨床的基準として優先されることを指摘している。また下山（1997）は、事例研究が心理学研究法として方法論的課題を論じられることの少なさについて、“専ら「実践」活動との関連で使用されるため、「研究」法として論じることが困難になっている”と述べ、実践と研究との乖離を憂慮している。このように研究法としての批判は日本国内でもなされてきたが、前述したような批判に対する議論や対処法の考案、新たな研究法の開発といった発展はなかった。

## 2) 研究法としての位置づけ

次に、国内の心理学会として最大の規模を誇る日本心理臨床学会作成の論文執筆ガイド（一般社団法人日本心理臨床学会、2012）から、事例研究の研究法としての位置づけを読み取る。“研究論文（Research and Practice）とは、事例、調査、実験、理論的検討などにに基づき、系統的に構成された論文である。”と、事例が研究法の最初に明記されており、その役割の大きさがうかがえる。また“心理臨床における研究方法としては、実践の

副産物としての事例研究や調査研究の投稿が大多数であるが、綿密な研究デザインに基づいた実証的研究も推奨される場所である。”と記されている。ここからは事例研究の投稿が主流であることに加え、事例研究は実証的研究とは異なる研究法であると認識されていることが読み取れる。さらに編集員の田畑や溝口は、投稿論文の査読にあたり事例報告を事例研究として論文にまとめることへの困難さや不十分さを同執筆ガイド内で指摘している。

これらの記述から、日本の臨床心理学における事例研究は、中心的な研究法として認められているものの、その枠組みは曖昧であり、現在に至るまで慣習的に用いられていると考えられる。

## 2. 過去10年間の国内事例研究の動向

### 1) 事例研究の分類

2004年1月から2014年8月までに発行された「心理臨床学研究」（年6回発行）、「カウンセリング研究」（年3回発行）、「臨床心理学」（年6回発行）に掲載された論文から、心理面接場面を用いた事例研究を抽出し、方法に関する内容を分類した。ただし、「カウンセリング研究」においては事例研究として掲載されているもののみカウントし、事例報告として掲載されている論文は除外した。その結果「心理臨床学研究」67編、「カウンセリング研究」27編、「臨床心理学」10編の計104編がリストアップされた。リストアップした論文の方法に関して内容別に表したものが表1である。

表1 過去10年間の事例研究の内容分類

	心理臨床学研究	カウンセリング研究	臨床心理学	3誌合計
事例研究掲載数	67	27	10	104
面接経過の記述のみ	45(67)	15(56)	7(70)	67(64)
量的分析の提示	4(6)	4(14)	1(10)	8(8)
複数の事例研究	4(6)	4(14)		8(8)
介入プログラム・ツールの実践		3(11)	1(10)	4(4)
投影法に基づく解釈	3(4)			3(3)
メタ事例研究	3(4)			3(3)
心理療法の理論構築・検証	1(1)	2(7)		3(3)

注) 括弧内の数値はパーセントを示す。

### 2) 分類のまとめ

表1からは、まず国内の主要な心理療法に関連する雑誌3誌に掲載された事例研究のうち、6割以上が「面接経過の記述のみ」ととどまっていることが分かった。クライアントの変化を客観的に示す質問紙などを用いた「量的分析の提示」がなされていた論文は、全体の8%であった。二事例以上の事例を研究対象とした「複数の事例研究」は8%であったが、比較し仮説を生成するような内容ではなく、事例を並列して考察される論文がほとんどであった。「介入プログラム・ツールの実践」は研究者が開発した介入用のツールやプログラムを事例内で実践、検証した内容であった。「投影法に基づく解釈」ではロールシャッハ・テストやTATの特徴と症状を関連させて考察していた。「メタ事例研究」ではいずれも岩壁(2005)が紹介したメタ事例研究法を用いて先行研究の分析、分類を行っていた。メタ分析とは、“複数の先行研究において得られた統計的結果をもとに、全体的な結論を導く統計解析手法”である(岩壁, 2005)。これを用いて体系的に事例研究をまとめる手法がメタ事例研究である。「心理療法の理論構築・検証」については、鈴木・鈴木(2006, 2008)は、まずエンパワメントアプローチ理論の仮説を生成し(2006)、続いて同モデルに基づいた介入を5事例に実施、結果の評価を行っていた(2008)。なお、表1には掲載していないが3誌の事例研究総掲載数104編のうち、面接の経過を説明する記述があった論文は96編で全体の92%に及んだ。日本において事例研究とは面接経過を詳細に記述するものであるという認識が強いことが推測された。

### 3. 系統的事例研究法の視点から考える課題

続いて、先に紹介した4つの系統的事例研究法の観点から、国内の事例研究の動向を踏まえて、その問題点を考察する。

まず1) 成果指向事例研究の視点からは、面接の成果を量的に示すことへの関心の低さが挙げら

れる。一連の心理面接を通してクライアントの変化を、尺度や質問紙を用いて量的分析を提示している事例研究は10年間でわずか8編と数少ない。当該8編の中は、質問紙の妥当性や信頼性を検証するために事例が用いられている研究もあり、量的分析が心理療法の効果を示す意図で用いられた論文はさらに数が少ない。質問紙などを用いて量的な結果を提示することの意義として McLeod (2010) は、読者に対しその時クライアントが実際にどういう状態だったかを明示することができ、研究者のバイアスを軽減することにつながると述べている。

続いて2) 理論指向事例研究の視点からは、新たな理論構築がほぼ行われていないという点が指摘できる。分類結果から、理論構築につながる研究は3編のみであることが明らかとなった。既存の心理学の理論や概念に当てはめて事例を考察する論文は数多くあるが、研究の結果から新しい理論や概念を生成する段階には至っていない。また、ある理論に基づいて考察し、理論と齟齬があるようなプロセスが面接でみられた場合も、当該事例の特徴として処理されることが多く、理論そのものを反駁するような発展はされていなかった。

次に3) 実践指向事例研究の視点からは、研究で得られた知見が積み上がっていないことが問題点として挙げられる。これは研究や論文のフォーマットが著者ごとに異なり、統一されていないことが大きく影響している。論文のまとめ方が個人に任されているため、関連した事例研究同士の比較が容易には行えない状況にある。結果的に、数多くの事例研究が発表されているにも関わらず、知見が累積されていない。Fishman (2004, 2005) は、事例研究の知を蓄積する上で、標準化されたフォーマットを利用することの重要性を指摘している。共通のフォーマットを用いることで研究の比較が可能となり、事例研究のデータベースが構築できると述べている。しかしこれまでの日本の

事例研究ではこういった研究の型が存在しない。また、分類からメタ事例研究を取り入れた研究が3編あることが分かった。しかし3編中2編は、分析対象が心理面接場面を扱った事例研究ではなく、家庭裁判月報に掲載された審判例であった。その理由について著者である橋本は、審判例は客観的な事実の掲載が中心で、主観的な事実が少なく、分析に際して予断が排除しやすいことを挙げている(橋本, 2007)。この記述は、国内の心理面接場面を扱った事例研究をメタ分析の対象として利用することの難しさを表していると考えられる。

最後に4) 体験・ナラティブ指向事例研究の観点からは、国内の事例研究ではセラピストの視点の研究が大多数を占め、クライアントの視点や体験そのものを扱う事例研究がほとんどないことが指摘できる。中村・田上(2008)は心理介入の対象となった不登校児と担任教師へ、自身の変化と関係性の変化についてインタビューを実施し、その体験を扱っている。しかし今回の調査では、研究対象者へのインタビューを実施した事例研究はこの1編のみであった。

#### 4. 課題への対応

国内の事例研究に対する論調やこれまでの研究を調査して感じたことは、事例研究が研究方法として「曖昧さ」を持つゆえに利用価値の高いものになっているということである。岩壁(2013b)は日本で実証研究が少ない理由について、臨床実践のあり方が“統制を必要とする研究デザインの枠に収まらないようなものばかりである”ことを指摘している。いわば日本の臨床実践の場そのものが大きな「曖昧さ」をはらんでいるがゆえに、「曖昧さ」を受け止める事例研究が有用なのであろう。この姿勢は河合(2001)が、事例研究の発表者と参加者の間でコミュニケーションされる間主観的普遍性は“言語によって表現できない”ものであり、“だからこそ事例研究が必要”だと述べて

いることに象徴されている。

科学的研究法の1つとして事例研究を定着させるためには、まず論文の投稿先である各雑誌の執筆規定において、事例研究の定義、事例報告との違いなど、方法論的枠組みを明示することが必要になるだろう。既にこれらの説明がなされている雑誌はあるが、内容に「曖昧さ」があることは否めない。Fishman(2005)が提示している執筆のフォーマットを参考にすることも役立つだろう。

より多くの量的分析を事例研究に導入するためには、心理面接に尺度による定期的なクライアントの状態測定を積極的に取り入れることも有効であると考えられる。面接と心理測定尺度をセットで用いることで、結果を定期的に分析する習慣が身に付き、またクライアントを客観的に理解する視点をもつことは、心理臨床家の訓練としても大変意味がある。

また、面接の録音や録画、インタビューの実施を啓発することも必要であろう。岩壁・小山(2002)は、“研究者の視点から心理療法の研究を行う利点が最大限に活かされるのは、治療過程のビデオや録音テープと面接のやりとりのトランスクリプトを併用することによる”と述べている。また亀口(2001)はビデオ記録によって、表情、態度、声の調子などの非言語的側面を分析できる点や、面接記録を自由に正確に繰り返し再現させ、複数の人間が直接観察できるようになる点を長所として挙げている。岩壁・小山、亀口の指摘している点は、いずれも系統的事例研究を行うために必要な条件といえる。しかし、今回の調査では面接の録音、録画、インタビューが行われた論文はほとんどなかった。日本ではこれらの記憶を伴う行為に対する否定的、消極的な見方が根強く残っている。こうした傾向がクライアントの心理療法体験やその意味といった実践的、教育的価値の高い研究の機会を減らしている可能性がうかがえる。

以上、国内の事例研究が抱える問題への対応に

ついて述べた。しかしいずれの内容も、短期間で心理臨床家個人に浸透することは難しいだろう。臨床心理学に関連する学会や大学院が主導してこれらの対処がなされていくことが最も効果的であると考える。

## VI おわりに

論文執筆を通じて数多くの事例研究に触れ、その魅力を強く感じた。生々しい描写に引き込まれ、読み終わると映画を見終わった後のように胸が熱くなり余韻が残る事例が多くあった。また事例内のクライアントを自身のクライアントと重ね、関係性や今後の介入に思いを馳せることも度々あった。筆者が感じた魅力は本文内の「ナラティブの知」に該当する事例研究特有のものであろう。

こうした事例研究ならではの特色を生かしながら、系統的な手法で研究を進めることで、関連する事例研究を比較し、問題の共有を促進し、知見が積み上げられる (Hepper et al., 1999) という点において、系統的な事例研究が国内外でその地位を高め、研究方法として定着していくことを期待する。

<付記>本論文の作成にあたり、ご指導賜りました岩壁茂先生、温かく励ましてくださった皆様方に感謝申し上げます。

## 文献

- Bolgar, H.(1965). The case study method. *Handbook of clinical psychology*, 28-39.
- Casement, P.(1985). *On learning from the Patient*. London: Tavistock.
- Casement, P.(1990). *Further learning from the patient: The analytic space and process*. London: Tavistock/Routledge.
- Dinnage,R.(1989). *One to one: The experience of psychotherapy*. Harmondsworth: Penguin.
- Dukes, W. F.(1965). N=1. *Psychological Bulletin*, **53**, 74-79.
- Edwards, D. J.(1998). Types of case study work: A conceptual framework for case-based research. *Journal of humanistic psychology*, **38**, 36-70.
- Edwards, D. J.(2007). Collaborative versus adversarial stances in scientific discourse: Implications for the role of systematic case studies in the development of evidence-based practice in psychotherapy. *Pragmatic case studies in psychotherapy*, **3**, 6-34.
- Elliott, R.(2002). Hermeneutic single-case efficacy design. *Psychotherapy research*, **12**, 1-21.
- Etherington, K.(2000). *Narrative approaches to working with adult male survivors of childhood sexual abuse: The clients', the counsellor's, and the researcher's stories*. London: Readers Digest.
- Fishman, D. B. (2004). Editor's introduction to PCSP-from single case to database: A new method for enhancing psychotherapy practice. *Pragmatic case studies in psychotherapy*, **1**, 1-50.
- Fishman, D. B., & Messer, S. B. (2005). Case-based studies as a source of unity in applied psychology. Sternberg, Robert J. (Ed) , *Unity in psychology: Possibility or pipedream?* Washington: American Psychological Association, 37-59.
- Freud, S. (1901). The case of Dora. *Pelican Freud Library, vol. 8: Case Histories 1*. Harmondsworth: Penguin.
- Freud, S. (1909). Notes upon a case of obsessional neurosis (the 'Rat man') . *Pelican Freud Library, vol. 9: Case Histories 2*. Harmondsworth: Penguin.
- Galassi, J. P., & Gersh, T. L. (1991). Single-case research in counseling. *Research in Counseling*, 119-161.
- 橋本 和明(2007). 虐待が深刻化する親のパートナー関係についての研究——事例のメタ分析を用いた類型化の試み 心理臨床学研究, **25**, 396-407.
- Heppner, P., Wampold, B., & Kivlighan Jr, D.(2007). *Research design in counseling*. Cengage Learning.
- Hill, C. E. (1989). *Therapist techniques and client outcomes: Eight cases of brief psychotherapy*. London: Sage Publications, Inc.
- 一般社団法人 日本心理臨床学会 (2012). 心理臨床学研究 論文執筆ガイド <[http://www.ajcp.info/pdf/rules/Publication\\_Man\\_uMa\\_for\\_Journal\\_of\\_AJCP.pdf](http://www.ajcp.info/pdf/rules/Publication_Man_uMa_for_Journal_of_AJCP.pdf)> (2014年10月10日)
- Iwakabe, S. (2011). Extending systematic case study method: Generating and testing hypotheses about therapeutic factors through comparisons of successful and unsuccessful cases. *Pragmatic case studies in psychotherapy*, **7**, 339-350.
- Iwakabe, S. (2013). Competing models of evidence and corroborating research strategies: Shaping the landscape of psychotherapy research in the

- era of evidence-based practice. *Psychologia*, **56**, 89-112.
- Iwakabe, S., & Gazzola, N. (2009). From single-case studies to practice-based knowledge: Aggregating and synthesizing case studies. *Psychotherapy research*, **19**, 601-611.
- 岩壁 茂・小山 充道 (2002). 心理臨床研究における科学性に関する一考察 心理臨床学研究, **5**, 443-452.
- 岩壁 茂(2005). 事例のメタ分析 日本家族心理学会 (編) 家族間暴力のカウンセリング 金子書房, 154-169.
- 岩壁 茂(2011). 心理療法のエビデンス——効果研究とメタ分析が示す治療的要因—— 心と社会, **42**, 61-67.
- 岩壁 茂 (2013a). 臨床心理学・最新研究レポート (第 6 回) エビデンスベースト事例研究：今ここでの関わりへの探索: Mayotte-blum J, slavin-mulford J, lehmann M, pesale F, becker-matero N., & hilsenroth M (2012). therapeutic immediacy across long-term psychodynamic psychotherapy: An evidence-based case study 臨床心理学, **13**, 881-886.
- 岩壁 茂 (2013b). 臨床心理学・最新研究レポート (第 1 回) 研究と実践の橋渡し 臨床心理学, **13**, 145-150.
- 岩壁 茂 (2013c). 臨床心理学における研究の多様性と科学性: 事例研究を超えて (特集 対人援助職の必須知識 研究の方法を知る) —— (臨床心理学研究の基礎) —— 臨床心理学, **13**, 313-318.
- 岩壁 茂(2010). はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究: 方法とプロセス 岩崎学術出版社.
- 河合 隼雄 (2001). 事例研究の意義 (特集 事例研究) 臨床心理学, **1**, 4-9.
- 河合 隼雄 (1986). 事例研究の意義と問題点——臨床心理学の立場から—— 臨床心理事例研究, **3**, 3-10.
- 亀口 憲治(2001). 家族システムの記述 (特集 家族の現在と家族療法) 臨床心理学, **4**, 476-482.
- Kazdin, A. E.(1981). Drawing valid inferences from case studies. *Journal of consulting and clinical psychology*, **49**, 183-192.
- Kazdin, A. E.(2008). Evidence-based treatment and practice: New opportunities to bridge clinical research and practice, enhance the knowledge base, and improve patient care. *American psychologist*, **63**, 146-159.
- Leitenberg, H.(1973). The use of single-case methodology in psychotherapy research. *Journal of abnormal psychology*, **82**, 87-101.
- Luborsky, L., Diguier, L., Seligman, D. A., Rosenthal, R., Krause, E. D., Johnson, S., Halperin, G., Bishop, M., Berman, J. S., & Schweizer, E.(1999). The researcher's own therapy allegiances: A "wild card" in comparisons of treatment efficacy. *Clinical psychology: Science and practice*, **6**, 95-106.
- Malan, D. H.(1979). *Individual psychotherapy and the science of psychodynamics*. London: Butterworths.
- McLeod, J.(2010). *Case study research in counselling and psychotherapy*. London: Sage Publications.
- McLeod, J.(2013). Increasing the rigor of case study evidence in therapy research. *Pragmatic case studies in psychotherapy*, **9**, 382-402.
- McLeod, J., & Elliott, R.(2011). Systematic case study research: A practice-oriented introduction to building an evidence base for counselling and psychotherapy. *Counselling and psychotherapy research*, **11**, 1-10.
- 村瀬 嘉代子(2001). 事例研究の倫理と責任 (特集 事例研究) 臨床心理学, **1**, 10-16.
- 中村 恵子・田上 不二夫(2008). 相談室登校の中学生の相談室での充実感と教室登校との関係 カウンセリング研究, **41**, 254-265.
- 大野 博(2001). 事例研究--行動科学的な視点から (特集 事例研究) 臨床心理学, **1**, 35-40.
- Råbu, M., Hytten, K., Haavind, H., & Binder, P.(2010). Development through interruptions and reparations—A case study of a dual challenging psychotherapy. *European journal of psychotherapy and counselling*, **12**, 293-309.
- 斎藤 清(2008). 事例研究という質的研究の意義 (特集 河合隼雄——その存在と足跡——) 臨床心理学, **8**, 27-34.
- Schneider, K. J.(1999). Multiple - case depth research: Bringing experience - near closer. *Journal of clinical psychology*, **55**, 1531-1540.
- Shapiro, M.(1961). The single case in fundamental clinical psychological research. *British journal of medical psychology*, **34**, 255-262.
- Strupp, H. H.(1980a). Success and failure in time-limited psychotherapy: A systematic comparison of two cases: Comparison 1. *Archives of General Psychiatry*, **37**, 595-603.
- Strupp, H. H.(1980b). Success and failure in time-limited psychotherapy: A systematic comparison of two cases: Comparison 2. *Archives of General Psychiatry*, **37**, 708-716.
- 下山 晴彦(1997). 臨床心理学における展開と課題 (「単一事例研究の展開と方法論的課題」) 教育心理学年報, **36**, 13-14.
- 下山 晴彦(2000). 事例研究 臨床心理学研究の技法 福村出版, 86-92.
- Stiles, W. B.(2007). Theory-building case studies of counselling and psychotherapy. *Counselling and psychotherapy research*, **7**, 122-127.
- Spence, D. P.(1989). Rhetoric vs. evidence as a source of persuasion: A critique of the case study genre. *Entering the circle: Hermeneutic investigation in*

- psychology*, 205-221.
- Spence, D. P.(2001). Dangers of anecdotal reports. *Journal of clinical psychology*, **57**, 37-41.
- 鈴木 純江・鈴木 聡志(2006). いじめられ体験をもつ予備校生に対するカウンセリング——エンパワメントの観点から—— *カウンセリング研究*, **39**, 49-58.
- 鈴木 純江・鈴木 聡志(2008). いじめの被害者に対する支援——エンパワメントアプローチによるカウンセリングの適用と検討—— *カウンセリング研究*, **41**, 169-179.
- Turpin, G.(2001). Single case methodology and psychotherapy evaluation. *Evidence in the psychological therapies: A critical guide for practitioners*, 91-113.
- 渡邊 誠 (2013). 臨床心理学における事例研究の役割に関する考察 北海道大学大学院教育学研究院紀要, **118**, 225-234.
- Watson, J. C., Goldman, R. N., & Greenberg, L. S.(2007). *Case studies in emotion-focused treatment of depression: A comparison of good and poor outcome*. American Psychological Association.
- Westen, D., Novotny, C. M., & Thompson-Brenner, H. (2004). The empirical status of empirically supported psychotherapies: Assumptions, findings, and reporting in controlled clinical trials. *Psychological Bulletin*, **130**, 631-663.
- 山川 裕樹(2012). 事例研究論文の研究スタイルをめぐる省察：事例研究論文の文献展望 *学生相談研究*, **33**, 193-212.
- 山本 力(2001). 心理臨床実践と事例研究 研究法としての事例研究 山本力・鶴田和美(編) *心理臨床家のための「事例研究」の進め方* 北大路書房, 2-29.